

巻頭言

「もうダメだ」というときが事のはじまり

教育後援会会長

安光 利文

4

特集 1

同窓会の今と、これから

同窓会会長

高橋 伸治

5

特集 2

同窓会と大学は不可分の互恵関係

学校法人千葉学園理事長

内田 茂男

10

新しい観光サービスの創造を発想し、実現する

サービス創造学部教授

山田 耕生

13

ゼミ紹介

学生企画のご紹介

山田ゼミナール×京成トランジットバス協働プロジェクト

商経学部商学科2年

渡辺 梨央

14

体育会 女子軟式野球部

商経学部商学科3年

島田 琉太郎

15

学生活動紹介

文化団体連合会 ESS部

商経学部商学科4年

曾志崎 壮

16

学生自治会本部団体 執行委員会

社会連携推進課

伊藤 雅敏

17

ニュース・イベント

「統合報告書2023」を発行／ほか

国際センター副学長

橋本 隆子

18

特別企画 創立100周年にむけて

国際センター副学長

橋本 隆子

22

国際センターニュース

国際センター副学長

橋本 隆子

24

TOEIC®360だった私がTOEIC®790をとって  
SakuraZenハイムにいる理由

商経学部経営学科3年

村瀬 佑介

24

キャリア支援センターニュース

キャリア支援センター長

川 瀬 功

27

就活！ 2024年卒・ほぼ総括と2025年卒動向

キャリア支援センター長

川 瀬 功

27

地域連携推進センターニュース

キャリア支援センター長

川 瀬 功

27

「CUC市民活動サポートプログラム」2024年度受講者募集／ほか

キャリア支援センター長

川 瀬 功

30

The University DINING ヌポロー

キャリア支援センター長

川 瀬 功

30

UDログインinいちかわを開催しました／ほか

キャリア支援センター長

川 瀬 功

32

CUCレポート

■ ライブラリーニュース

「第8回書評コンテスト」表彰式開催

■ 文化団体連合会・体育会所属各部の活動近況

教育後援会活動

教育後援会活動報告／ほか

保護者会開催報告

CUC保護者会開催について(開催報告)／ほか

活躍する卒業生

第二の青春 千葉商科大学大学院

株式会社共栄キャピタルマネジメント  
代表取締役社長

枝村 圭一郎

■ 本部からの報告

広報・IT委員会

■ 支部からの報告

青森・長沼 弘次／秋田・笹淵 義春／茨城・池野 辺修／栃木・齋藤 勉／  
山梨・藤原 進／静岡・谷口 吉二郎／愛知・大畑 昇／新潟・南雲 弘道

■ 同期会・その他からの報告

41会・井手之上 裕昭／47会・清水 治郎／  
50会・谷口 吉二郎／瑞穂会・小宮 尚

■ 同窓生寄稿

飯塚 雅幸／宮庄 秀一

同窓会活動

同窓生のお宿・お店紹介「羽生物吾商店」

平成15年商経学部商学科卒業 羽生 惣亮

CUC経営者会議

CUC経営者会議ニュース

石井幸夫氏、モンゴル商工会議所よりシルクロード褒章を受章／ほか

72

随筆

学徒(続)渡辺崇先輩(武山海兵団横須賀市)  
横須賀市長上地克明様からの御礼メッセージ  
地域研究と多様性

体育会OJ会副会長 卓球部OJ会会長  
同窓会理事  
人間社会学部専任講師

藤山 幸一  
青木 佳子

78  
80

著書紹介

感覚訴求が消費者の感情と認知に及ぼす影響  
無自覚な連鎖反応のメカニズム

商経学部准教授

西井 真祐子

82

▼第53期・54期同窓会維持会費等納入者一覧 83 ▼同窓会役員および支部事務局一覧 94 ▼編集後記 96

# 同窓会の今と、これから



同窓会 会長

## 高橋 伸治

私たちの「ふる里」である千葉商科大学は創立100周年を迎えようとしています。その歴史は大正、昭和、平成、令和と続き、大きな変化の連続でした。経済環境は大正ロマンからの好景気、不景気を繰り返し、そしてバブル崩壊を経て、失われた30年といわれる冬の時代を迎えました。残念ながら、今の日本は先輩たちが積み重ねてきた過去の宝物を失ってしまったのではないかと思います。

50年の歴史を持つ私たちの同窓会は昭和40年以降の千

葉商科大学の変化、日本社会の変化と共に育ってきました。同窓会の運営に携わってこられた諸先輩の皆さまに對して多大なる敬意を表したいと思います。本学を卒業された卒業生の数は9万人を超えています。私たち同窓会は「たて、よこ、ななめ」の連絡を卒業生の皆さまと取り合うシステムを構築することが急務になっています。

日本の社会は、この50年間で平均寿命が大きく延びて100歳を超える長寿者が多数出現しました。この幸せ多い社会は社会構造を大きく変えました。長寿社会の進

展は「二世代社会」から「三世代社会」へと大変革を起しました。この流れは今まで以上にお互いのコミュニケーションが取りづらい仕組みになってしまいました。「うえ」「した」の関係から、現在若年層が志向している「よこ」「ななめ」の関係へと変化したことと無関係ではないと思っています。

現在、私たち同窓会への若手卒業生の協力は一部に限られています。この大きな問題に対して、無関心ではない現実がそこに横たわっています。また、同窓会活動のほとんどが同窓会員のボランティア活動だけに頼っているため、一生懸命に活動していただける同窓会員には時間的にも金銭的にも多大なる負担が生じています。これからの同窓会活動は大学、同窓会、卒業生が心をひとつにしてwin-winの関係構築をしていくべきでありましょう。

インフレ時代を生きた同窓生とデフレ時代に育った若い卒業生では考え方が大きく異なります。さまざまな世代の卒業生がひとつに集まった同窓会という組織はお互いを理解し合わなければ、前進することはありません。特に変化の激しい現代社会ではコミュニケーションの不足は組織の命取りになります。

その間に、国の教育制度もさまざまな変遷を経て、現在に至っております。昭和の終わりから平成にかけては大学への進学率も高くなり、卒業生の数も急激に増えていきました。現在では少子化時代に突入し、大学の数も飛躍的に多くなったことから、「大学冬の時代」といわれる過当競争時代を迎えています。私は昭和52年（1977年）の卒業生ですが、同期生は2000人ぐらいいたのではないのでしょうか。同期生が少なかった年代の皆さまと多数の同期生がいる世代とは同窓会に対する考え方も違つて当然です。

また、3年にわたる新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響はさまざまな分野に出ています。私たちの同窓会だけでなく、社会の多くの部分でコミュニティの衰退現象が表面化しています。一度途切れた関係はなかなか元には戻りません。私の所属している多くのコミュニティで高齢者の皆さまを中心に退会者が相次いでいます。流行語になった「3年ぶり」という言葉の意味は非常に大きかったです。また、この間に進化したテレワークや生成AI、3Dプリンターなどの技術によって、人間の仕事の代替が大きく進んでいき、今では若い人たちを中心に時間の使い方を考慮した生き方が主流になりつ

つあります。時間に関する概念が大きく変わった流れにうまく乗って、同窓会組織も今の時流に合った形でなければなりません。

私たち同窓会の理念は「会員相互の交流と親睦を図り、組織および会員の発展・充実並びに建学の精神に則った千葉商科大学の発展に寄与すること」と規定されています。時代の変化の中で、この問題を突き詰めていくと「同窓会はなぜ存在するのか」に突き当たります。「私たち同窓会の大義は何なのか」を、同窓会の皆さまと新たな時代を迎えるために深く考えていかなければなりません。

私たち同窓会に対して、若い卒業生たちは違和感を持っていきます。同窓会に参加している私たちが同窓会に参加していない卒業生の心情を意識しない限り参加者を増やすことはできないでしょう。大勢の卒業生たちは私たち同窓会の中で自分の居場所はないと感じています。現実社会の中で若い世代の人たちが求めているものは「承認欲求」です。SNSの普及によって、オリジナルティのある生き方をしているか、好きなことを仕事にしているか、輝いているかなど、より一層複雑になってきています。それにより、同窓会に出席し「今、どうしているのか」と聞かれたときに、どう答えていいのかが分か

らなくなってしまう人が増えていきます。多様な生き方が許容されている社会だからこそ、現役世代は「自信を失いやすい環境に生きているのかもしれない」。この問題は社会全体の問題ではありますが、私たち同窓会では、お互いに理解し合える関係構築を積極的につくりあげていかなければならないと考えます。

今までも同窓会の主流は60歳以上の卒業生たちでした。60歳までは、どうしても、どこの会社にいるか、その会社で役員になれるかなど、会社という枠での違いをお互いが気にしてしまいましたが、60歳を過ぎると大企業で出世した人も、小さな会社で成功した人も、横一線の考え方に変わってきます。「承認欲求」が薄くなり、話題の中心は全員の共通の関心事である健康や家族の問題になっていきます。そんなときに、同窓生と損得なしで、恰好つけずに話せる環境が整うのです。だから、60歳以上の参加者が多いのです。

同窓会を活性化するためには若い世代の皆さまとの共通の話題をつくり出さなければ、新しい時代の同窓会は成立しません。毎年行われる総会でもテーマを決めることが重要になってきます。

時代は大きく変わり、3DプリンターとチャットGP

Tの出現によって実社会で仕事をしているすべての世代の皆さまに、新しい知識を要求する流れができてしまいました。過去の成功例が通用せず、優れた手法はすぐに真似されてしまう「正解のない時代」です。これからも世界はどんどん変化していきます。その新たな流れを的確につかみ、人を大切にする理念のもとに、これからの社会に対応できる同窓会組織にしていかなければなりません。

若い卒業生たちが私たち同窓会に参加してもらうためには、まだまだ「参加する要因」よりも「参加しにくい要因」のほうが大きいことも現実です。実社会で活躍している卒業生が喜んで参加する組織にするには、私たち同窓会が成功者だけの集まる場所という考え方をなくさなければなりません。そのためには、結果だけを見る世界ではなく、今を生きるという過程を大切にする組織にしなければなりません。私たち同窓会はコミュニケーション実践の場となり、若い社会人たちが実社会の中で活躍するための「うしろだて」になってくれる先輩を探す場所になることも大切です。

人口減少社会は、これからの時代を大きく変えていきます。今まではつくることがすべてでしたが、社会の要

請でつくり出したものは維持管理をして、発展をさせなければなりません。組織も同じでつくるだけではなく、その組織を維持発展させなければなりません。使い捨て時代に育った私たち世代には乗り越えるべき壁がそこにあります。私たち同窓会も新しい組織をつくり出すだけの仕事では済まされないと、現実には直面しています。

同窓会の大きな課題のひとつは、ボランティア団体であることです。意識も高く、非常に大きな活動をしていただいていることには多大なる感謝をしています。しかし、活動が盛んになり、イベントごとが多くなると多くの時間、労力、お金が必要になってきます。この負担を組織が吸収できなくなると、組織は減んでいき、最後は「なかよしクラブ」になってしまいます。国立博物館問題はボランティア意識だけでは物事に行き詰まるということを物語っています。この問題は今までタブー視されてきましたが、真剣に論議する課題です。もうひとつは、50歳以下の卒業生の皆さまには、長期的な視点から継続的なサービスをすることが大切です。このことが同窓会をより強くすることだと信じています。しかし、この問題は大学側の多大なる協力がなければ解決することができない大きな課題です。

千葉商科大学は、「社会に必要とされる大学」をめざして、大きく変わろうとしています。その教育理念は「教育の要は、人の大なるを知り、人をしてその大なる所以の者を知らしむるにあり、亦人に接するの第一義なり」と



書かれています。人や地域を大切にしたい考え方のもとに地域の発展、国の発展があるのではないでしょうか。また、社会の変化が大きく「正解のない」時代である現在では人生を通じて学び続けることが必要となっています。大学、先生方、同窓会が一体となって、国が進めている「新しいリスキング社会」を実現していかなければなりません。この問題は労働力の流動化にとどまらず、社会人として学び続けることの必要な社会構造をつくり出します。同窓会には多くの社長さんたちがいるので、本部、支部の力を結集して人生を通じて千葉商科大学で学び続ける仕組みをつくっていききたいと思っています。

私たち同窓会が発展していくためには社会の流れを的確につかみ、千葉商科大学の時代に挑戦するパワーに協力すること、現場の第一線で活躍している教員、職員の皆さまと心をひとつにすること、在学生に心を寄せる教育後援会の皆さまと意見調整をすることが大切です。三位一体、真の意味での「オールCCUC」を実現することに同窓会の力を傾注することが大切です。その中で、最も大切なことは若い卒業生たちが同窓会の中に自分の居場所をつくれるかどうかにかかっています。



千葉商科大学  
同窓会  
公式Webサイト  
二次元コード

## 第二の青春 千葉商科大学大学院



### 枝村 圭一郎

株式会社共栄キャピタルマネジメント 代表取締役社長  
千葉商科大学経済研究所 客員研究員  
平成30年 大学院商学研究科修士課程修了

平成28年(2016年)3月21日、入学式を前に始まるブレ講座に参加して、2年間に亘る千葉商科大学での大学院生活がスタートしました。

翌月の4月2日には入学式がありました。前日には大学を卒業して就職した長男の入社式もあり、47歳にして社会人入学をした私にとっては、職場の新年度に伴う業務繁忙と併せ、怒涛の忙しさの始まりでもありました。なにしろ、平日は勤務する都市銀行で本部の行員として、営業店(支店・支社)を10カ店ほど担当し、月曜から金曜まで、かつ朝から夕方までスケジュールが埋まって

いました。営業店に行って打ち合わせをし、また取引先さまざま数多く訪問する中で、土日は大学院で朝の9時から夕方18時まで講義がありました。

以上により、在学中に休みのない2年間は、今振り返っても「私も皆(同期生)も、よく頑張ったな」としみじみ思います。

私を通った千葉商科大学大学院は、中小企業庁から認定された中小企業診断士養成コースで、2年間の講義の90%超の出席率と一定の成績を確保すれば、卒業(修了)と同時に国家資格である中小企業診断士の資格が取得で



きる制度となっておりますが、一方でどんなに優秀でも、出席率が90%未満なら資格が取れないという厳しさもありました。

私たちが入学した7期生は総勢14名。30歳になったばかりの若手から、大手企業を退職した60歳過ぎの方まで、バラエティに富んだメンバー構成でしたが、最初から「チームワーク」が取れた仲間でした。

名称が中小企業診断士養成プログラムに変わり、現在は13期生の2年生と14期生の1年生が在学していますが、大学院課の事務の方や講義をされた先生たちにお話を伺うと、『7期生は仲が良く、まとまっていた良い代だったね』と言われることが多く、構成メンバーの一人として、とても嬉しく誇りに思います。

現在も7期生の同期とはグループLINEで繋がっており、さまざまな業務や案件の相談をすると、複数名から必ず返事がきて解決策を教えてくれるなど、卒業してからも温かい関係が続いております。令和5年(2023年)12月にも、千葉商科大学経済研究所のセミナーに同期である7期生の2名が登壇者(スピーカー)としてDXの知見を発表しましたが、その後は同期生の忘年会に過半数のメンバーが集まり、遠くは沖縄県から駆けつけ

たメンバーもおりました。

大学院に在学中の思い出としては、実務実習という中小企業に訪問して診断調査レポートを作成する課題が5回ありましたが、そのうちのひとつに、東京都町田市での企業実習がありました。2日間連続の実習となり、八王子の大学セミナーハウスに宿泊し大学生たちと一緒に朝食を取ったところ、同じ宿泊している大学生に「おはようございます！」と元気に挨拶をされました。我々は「大学の先生と間違われているね。私たちも同じ学生なんだけど……(笑)」などと談笑したのは、大変な実習の



大学院在籍時の製造業実習にて  
(前列中央が筆者)

中での楽しい記憶として残っています。

在学中の2年間は講義や実習、また修士論文を書くためのゼミにも参加し、日々真剣勝負で過ごしていました。民間企業で収益を追い求め、日々プレッシャーを受けるストレスとは違う緊張感が、当時はきつく感じましたが、今振り返ると懐かしくて素晴らしい日々を過ごせたと実感しております。大学生時代(1987年～1991年)はバブル最高潮の時期だったので、それはそれで楽しい「青春」でしたが、社会人になって「第二の青春」が千葉商科大学の大学院で待ち受けているとは夢にも思いませんでした。資格や知識の習得だけでなく、仲間との出逢いも含め生涯の財産となりました。

私は現在、中小企業診断士の肩書を生かして3年半前に独立して経営コンサルティング会社を設立しました。最初の半年は予期せぬ状況から追い込まれましたが、一人で業務を運営する中、法人顧問先が10社近くあり、また上場企業が絡むM&Aに複数関与したこともあり、安定した業績を計上するに至りました。

また、私は千葉商科大学経済研究所中小企業研究・支援機構に客員研究員としても在籍し、先日の令和5年(2023年)11月2日には、日本経済新聞朝刊の「私見

卓見」欄に、客員研究員として執筆した投稿記事が掲載されました(『タイトル：中小企業にも社外取締役制度を』)。

さて順番が逆になりましたが、私の社会人としての略歴をお話すると、1991年(平成3年)に群馬県の公立大学経済学部を卒業し、地元の茨城県に戻って第一地方銀行に入社し、13年強の勤務で4カ店1本部を経験。その後、意気投合した経営者とベンチャー企業を設立して3年、常務取締役の立場より株式上場をめざして猛烈に働きました。残念ながら上場は果たせず、また社長と袂を分かち決断をして、リーマンショックの前年にメガバンク系の証券会社に入社。証券会社では地方銀行本体・法人・個人を対象に営業活動を6年行い、その後に金融グループの人事交流で都市銀行(いわゆるメガバンク)に出向し、最初は名古屋の支店で主に個人向け営業をしていましたが、次の転勤では東京の法人本部で法人支社の営業サポートを5年近く行いました。

社会人としてのキャリアを自分自身で振り返ってみると、「よくもまあ、色々な業務に関わったなあ。最初の地方銀行にそのまま在籍していれば、楽に相応の役職と報酬がもらえたのになあ」と思う部分もありましたが、こ



同期生と2023年12月に忘年会(右手前が筆者)

の雑多な経験や失敗だらけのキャリアの中でも、「顧客第一主義(感動サービス業)」を胸に秘め、30年間に亘り常にお客さま視点で「全力を尽くす」中で、いつも貧乏くじを引いてやせ我慢してきたように感じますが、結果として今に繋がっていると考えると、「悪くないな」と思えるようになりました。

なお、独立してからM&A業務などに携わっていると、地方銀行在籍時の後輩(現在M&A会社に転職)の年収が1億円オーバーとか、大きな話が飛び交うことも多々ありますが、現在54歳の私にとって自身のやるべき姿は、

中小企業を中心とした経営サポートで、日本経済の真の復興をめざすことが使命であるとわかるようになりました。

赤字経営は良くありませんが、だからといって法外な報酬だけもらって、後は知らない(M&Aの

場合には、売買が成立後に経営統合化作業というPMIが重要)といった無責任なビジネスはしたくないと痛感しました。やはり三方良し(共に栄える・Win-Win)の精神は極めて重要であると再認識した次第であります。

第二の青春を送った千葉商科大学大学院ですが、卒業後に大学院へお世話になった恩返しとして、カリキュラム上必要な企業実習先の紹介を続けていたところ、サブインストラクターをやってみないかと声を掛けていただき、その後3年間企業実習の補助サポートをし、令和6年(2024年)4月から客員教員に就任する見通しとなりました。加えて、仲が良かった同期の2名と一緒に就任予定となり、嬉しさ倍増です。

最後になりますが、私には大切に行っているキーワードがあり、念仏のように唱えるようにしています(笑)。

それは、『AGNO(エージーエヌオー)』です。

A(あいさつ)・G(義理)・N(人情)・O(恩返し)を意識して社会人生活を送り、特にこの10年はAGNOを徹底して取り組んできた結果、道が拓けた感じがします。

千葉商科大学出身として自信と誇りを持ち、人生の折り返し地点はなく、人生益々前進の気持ちで卒業生の仲間全員と共に素晴らしい人生を送りたいと思います。